

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K01447

研究課題名（和文）タイにおける国王の政治的役割の変化と「国体」概念の揺らぎ

研究課題名（英文）Thailand: Changing Political Roles of the King and Destabilization of the National Polity

研究代表者

浅見 靖仁 (Asami, Yasuhiito)

法政大学・法学部・教授

研究者番号：60251500

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本タイ学会（2018年度、2019年度、2021年度、2022年度）、アジア政経学会（2018年度）、日本比較政治学会（2020年）の研究大会で研究成果を発表し、2021年度に出版された単行本『タイの近代化：その成果と問題点』（阿曾村邦昭編）に所収された「タイにおける王室の政治的役割の変化と民主主義の混迷」という章も執筆した。法政大学法学部が発行する『法學志林』に「バンコクの地域的多様性と有権者の投票行動：政治対立の構図と世代間格差の交差」と題する論文を2022年度に発表した際には、タイ政治の新たな対立軸の1つとして王室の政治的関与に対する考え方の違いを指摘し、本研究の成果を反映させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究はタイで大規模な王政改革要求デモが起きる2年目の2018年に開始し、王政改革要求運動が表面化する以前から、若い世代の間で王政に対する不満が高まっていることを指摘し、その背景の分析を行った。日本における従来のタイの王政研究では、王政に対する不満を学術的に正面から分析したものはほぼ皆無であったことから、本研究は学術界だけでなく一般のメディアからも注目され、2020年に王政改革要求運動が盛り上がりを見せた際には、報道各社からコメントを求められた。学術面では、王政をめぐる意見対立を新たな社会的亀裂としてとらえ、比較政治学的枠組みの中に位置づけ、民主化論と関連づけて論じることを可能にした。

研究成果の概要（英文）：The research results were presented in the annual conventions of the Japanese Society of Thai Studies in 2018, 2019, 2021, and 2022, the 2018 Autumn Convention of the Japan Association for Asian Studies, and the annual convention of the Japan Association for Comparative Politics in 2020. Based on the findings of this research, I wrote a chapter titled, "Changing Political Role of the Thai Royal Family and Entangled Democracy," in a book published in May 2021, and an article titled, "Geographical Diversity of Voting Behavior among Bangkok Residents: The Interaction of Political Cleavages and Generational Differences," in Review of Law and Political Sciences in January 2023, in which I pointed out the conflicting views on the monarchy created a new political cleavage that may overshadow the old ones.

研究分野：比較政治学、東南アジア研究

キーワード：タイ 王室 プミボン ワチラロンコーン 国王 政治 王政 民主化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、プーミポン前国王が崩御した翌年の2017年に構想し、2018年から研究を開始した。タイ政治において、王室が重要な役割を果たしてきたことはタイ政治を研究している誰もが認めることである。しかし、本研究を開始した2018年の時点では、タイ王室の政治的役割を真正面から分析した先行研究は非常に少なかった。これは1つには、タイの王室の政治的役割について論じることは、タイ人研究者の間だけでなく、外国人研究者の間でも、タブー視されてきたことによる。タイの国王の政治的役割について論じることは、論じ方によっては不敬罪に問われるリスクがある。しかしそうしたリスクが比較的少ない外国人研究者の間でも、王室の政治的役割を真正面から分析した本格的な研究があまり行われて来なかったのは、方法論的な難しさもあったからである。

タイでは1932年に同国初の憲法が制定され、絶対王政から立憲王政への移行が行われた。移行時に国王であったプラチャーティポック(ラーマ7世)は、王族にかわって権力を掌握した平民中心の新政府との軋轢から、翌年には病氣療養を名目にイギリスに逃亡し、1935年には退位を宣言した。王位は、彼の甥で、スイスの小学校に通っていた当時まだ9歳だったアーナンタマヒドン(ラーマ8世)が継いだ。即位後も20歳になるまでスイスに滞在し続けた。アーナンタマヒドンは、1945年12月にタイに帰国したが、その半年後には王宮内で急死した。アーナンタマヒドンの死後即位したのが、弟のプーミポン(ラーマ9世)で、2016年10月に逝去するまで、70年の長きにわたって王位にあった。タイで立憲王政が定着した状況下で王位にあったのは、プーミポン一人だけという状況が2016年10月まで続いたのである。このため、プーミポン国王の政治的役割については、どこまでが制度的要因によるもので、どこまでが属人的な要因によるものなのか、またどこまでがタイの社会経済的な変化や王室以外の政治アクター間のパワーバランスの変化によるもので、どこまでがプーミポン国王の経験の蓄積や家族関係の変化によるものかを峻別することが難しかった。

しかしプーミポン国王の死後、対照的な性格の息子のワチラロンコーンが即位したことにより、タイの国王の政治的役割について、従来峻別することが難しかったさまざまな要因を分析することが容易になることが予想されたため、ワチラロンコーン国王(ラーマ10世)の治世の最初の5年間を実証的に研究することによって、王室の政治的役割とタイ政治全体の変化との間の相互関係について、新たな知見を提示することを目指して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究は、タイを事例として、立憲王政下の王室の政治的役割の変化が、「国体(タイ語ではラックタイ)」概念やタイ政治に与える影響を明らかにするとともに、比較王政論への理論的な貢献も目的とした。

本研究では、タイの「特殊性」にだけ着目するのではなく、立憲王政下での王室の役割についての一般理論の構築を視野に入れながら考察を行った。比較政治学の分野における比較王政論の進展にも十分な注意と関心を払い、王室の政治への関与を時系列順に羅列するだけでなく、王室の政治的役割の変化をタイ現代政治の大きな流れの中に位置づけ、それによってタイの現代政治史研究に新たな視点を提供することも目指した。

3. 研究の方法

タイの王室の政治的役割と「国体」概念の変化を総合的に分析するにはさまざまな困難がある。本来であれば知識人層だけでなく、一般国民の意識の変化についても調べる必要があるが、現在のタイの政治状況では、王室の位置付けも含めるかたちで国体概念について数多くの一般国民を対象にアンケート調査を行うことは難しく、また行ったとしても、王室に対する批判的な発言をすることが厳しく禁じられている状況で

は、信頼できる調査結果が得られない可能性が大きい。そこで本研究では、「国体」概念の変化については、プーミポン前国王の治世下で「国体」について有力な見解を述べたタイ人論者や有力政治指導者の言説が、ワチラロンコーン新国王の治世下でどのように変化したかに主な焦点をあてることとした。スラック・シワラックやソムサク・チアムティーラサクン、ニティラート・グループの法学者らの非主流派の「国体」論の変化にも注意を払うが、まずは主流派の「国体」論の変化を、主要な論者の著作や発言、さらには公文書等での王室への言及のしかたなどを詳細に検討することによって明らかにすることを中心課題として研究を開始した。

ところが研究開始 3 年目の 2020 年に若い世代を中心とした王室改革要求運動が大きく盛り上がり、王室の政治的役割をめぐるタイでの議論のあり方に大きな変化が生じた。このため 2020 年以降は、王室改革要求運動の指導者たちの言説分析や、そうした動きに強く反発する王室擁護派の言説の分析にも多くの時間を割くことにした。2020 年以降の新しい動きは、集会の場での演説、プラカードや落書き、それらを撮影した映像や画像のインターネット上での拡散、SNS への投稿というかたちで主に行われたため、インターネット上での情報収集が中心となったが、2021 年度にコロナ禍による渡航制限が緩和され、タイでフィールド調査を行えるようになってからは、王政改革要求デモの場に行ったり、運動のリーダーや一般参加者への聞き取り調査も行ったりした。

4. 研究成果

本研究は 4 年間の予定であったが、コロナ禍のため海外調査を行えない時期があり、1 年延長して 2022 年度まで行った。5 年間に 12 回計 105 日間の現地調査を行った。

ワチラロンコーンの即位後、タイでも王室の政治的役割をめぐる議論が盛んになり、プーミポン前国王の治世についての情報も入手しやすくなり、ワチラロンコーン新国王の治世だけでなく、プーミポン前国王時代の王室の政治的役割についての研究も深めることができた。また王室の政治的役割の変化をタイの現代政治の流れの中に位置づけ、民主化や民主主義の後退をめぐる比較政治学の分野の理論的研究とも関連付けながら考察を行い、王室の政治的役割の変化とタイ政治の変化との間には双方向の因果関係があることを指摘しつつも、王室の政治的役割の変化はタイの政治変化や社会経済的な変化の説明変数ととらえるよりも、被説明変数としてとらえる方が多くの場合、適切であることを指摘することもできた。

本研究の成果は、『タイの近代化: その成果と問題点』(阿曾村邦昭編、文眞堂、2021 年 3 月)という単行本に所収された「タイにおける王室の政治的役割の変化と民主主義の混迷」という章にまとめて発表した。法政大学法学部が発行する『法學志林』(120 巻 3 号、2022 年 1 月)に掲載された「バンコクの地域的多様性と有権者の投票行動: 政治対立の構図と世代間格差の交差」と題する論文においても、タイ政治の新たな対立軸の 1 つとして王室の政治的関与に対する考え方の違いを指摘し、本研究の成果を反映させた。

学会発表については、2018 年度には、日本タイ学会の研究大会において“Reforming Thai politics for equality and justice”と題する分科会を開設し、司会兼コメンテーターを務めた。アジア政経学会の秋季研究大会では、“Do Democracies Decline in Asia?”と題する分科会の司会兼コメンテーターを務めた。どちらの研究大会でも本研究の成果をコメントに反映させることができた。

2019 年度には、日本タイ学会の研究大会において「ラーマ 10 世即位後のネットワーク・モナーキーの変質」と題する研究報告を行った。

2020 年度には、日本比較政治学会の研究大会に「タイにおける王室の政治的役割の変化と民主主義の迷走」と題するペーパーを提出し、口頭発表も行った。

2021 年度には、日本タイ学会の研究大会において『プミポン・コンセンサス』再考：その成立過程と負の遺産』というタイトルで発表も行った。

また新聞やテレビ、ラジオの報道番組で解説したり、講演を行ったりして、研究成果を広く社会に還元することにも努めた。2019 年 2 月にタイ国家維持党が、首相候補としてワチラロンコーン国王の実姉のウボンラットを指名したのに対し、ワチラロンコーン国王がそれを認めず、タイ国家維持党が解党させられた際には、タイの新聞 The Nation と朝日新聞にコメントが掲載された。ワチラロンコーン国王即位後最初の総選挙である 2019 年 3 月の総選挙に関しては、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞にコメントが掲載された他、日本記者クラブで講演も行った（4 月 18 日）。2020 年 2 月に王政改革に積極的な姿勢を見せていた新未来党が解党を命じられた際には、BBC のタイ語放送に出演してタイ語でコメントを述べ、毎日新聞にもコメントが掲載された。2020 年 8-12 月に王室改革要求運動が大きな盛り上がりを見せた際には、読売新聞、毎日新聞にコメントが掲載された他、NHK、テレビ朝日、TBS テレビ、文化放送、TBS ラジオの報道番組に出演してコメントを述べた。日本記者クラブでも王室改革要求運動について 2020 年 12 月 18 日に講演を行った。

タイに進出している日本企業の関係者を主な聴衆とする日タイ経済協力協会の公開セミナーにおいても、2019 年 6 月 7 日、2020 年 10 月 1 日、2021 年 10 月 29 日に王室の政治関与や王室改革要求運動についても触れながら講演を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 浅見 靖仁	4. 巻 66
2. 論文標題 序論：アジアにおける民主主義の後退の構造とエージェンシー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア研究	6. 最初と最後の頁 38～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11479/asianstudies.66.2_38	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浅見 靖仁・松本 朋子	4. 巻 130
2. 論文標題 バンコクの地域的多様性と有権者の投票行動：政治対立の構図と世代間格差の交差	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 法學志林	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 浅見靖仁
2. 発表標題 「プミボン・コンセンサス」再考：その成立過程と負の遺産
3. 学会等名 日本タイ学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅見靖仁
2. 発表標題 タイにおける王室の政治的役割の変化と民主主義の迷走
3. 学会等名 日本比較政治学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浅見靖仁
2. 発表標題 ラーマ10世即位後のネットワーク・モナーキーの変質
3. 学会等名 日本タイ学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浅見靖仁
2. 発表標題 Do Democracies Decline in Asia?
3. 学会等名 アジア政経学会秋季研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 浅見靖仁
2. 発表標題 ウボンラット王女擁立騒動をどう見るか。
3. 学会等名 日本タイ学会定例研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 阿曾村邦昭	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文眞堂	5. 総ページ数 266
3. 書名 タイの近代化：その成果と問題点 （169-209頁を執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------